

むらかみ

## 元気マガジン

Vol.12

村上に来て感じた三つのステキ!!

ステキ一、当たり前を買っていたものが村上には溢れている

山に行けば山菜や栗、きのこ等が豊富にあったり、米や野菜も手作りが基本。今までスーパーで買ってた手に入れていたものが普通にごろごろあって素晴らしい。

ステキ二、お金をかけなくても楽しく遊べる

休日はおにぎりを持って海へ出掛けたり、工場も掘りを楽しんだりとお金をかけずに有意義な時間が過ごせる。

ステキ三、お互い助け合いの暮らしがある

横浜に住んでいた頃はアパートの隣の部屋に

誰か住んでいるかも分からなかったが、村上に来てからは集落が家族のようでお互いのことをよく知っている。

だからこそ、助け合うことができ、私にも困ったことがあれば手を差し伸べてくれ、とても助かっている。

村上市地域おこし協力隊 加藤成美

## CONTENTS

【特集】

補助人と一緒に  
地域を盛り上げる!

2 村上市地域おこし協力隊  
一年を振り返る本音対談

5 データで見る  
地域おこし協力隊とは

6 雑感  
補助人との出会いが  
地域を元気にするか?

7 面白い人  
取り組み紹介インタビュー  
風かおる丘ハーブメイックあらかわ  
酒井幸子さんに直撃!

8 地域団体紹介  
村上市 ohana ネット

特集



**鈴木 順子** すずき じゅんこ  
38歳 旧山北町小俣・大代集落担当  
埼玉県坂戸市出身。山形県の芸術系  
大学卒業後、全国各地で現代アート  
に取り組む。山北にある当たり前の  
暮らしに魅力を感じ記録すると同時  
に、独自の視点での情報発信に取り  
組む。



**加藤 成美** かとう なるみ  
26歳 旧朝日村長津地域担当  
新潟市出身。大学入学と同時に東京  
へ行き、神奈川県保険会社に就職  
して営業を担当していた。食・農に  
関心を持ち、郷土料理などを学び、  
自らの畑で野菜を育てながら活動に  
取り組む。

ほじょにん  
**補助人と一緒に**

**地域を盛り上げる**

こんな活動をしたい！課題を解決するため必要な活動がある！  
そんなアイデアを実現するために、資金面で手助けしてくれるのが「補助金」ですが、今、お金ではなく人の手を借りる「補助人」の存在が注目されています。補助人の代表格が、村上市でも話題の「地域おこし協力隊」です。昨年4月から補助人として村上で活動している2人に1年過ごした本音を語っていただきました。

―村上に来たきっかけは

**鈴木順子**（以下鈴木） 埼玉県出身で山形県にある芸術系の大学を卒業して、現代アートの活動をしていました。活動場所は全国各地。長崎県では、潰れてしまった波佐見焼きついでいう磁器をつくっていた工場をリノベーションし、その後、富山県氷見市にあるアートNPOで活動していました。その頃アーティストという生き方がいいなと思っていて、それで満足していたはずが満足しきれなくなると、疑いが生まれてきていました。

そんなときに山北に通っていた知り合いから「マタギと飲まないか？」って声をかけてもらって。新潟は隣の県だし、マタギと会ってみたいと気軽な気持ちで行ったら、そこは山北地区の山熊田というところでした。話を聞いたり、暮らしを見たりしていたら、当たり前そこに暮らしている人たちが、めっちゃくちやかつこよかったんですよ。人間一人一人がすごい

大事で、生きていくために必要なやるべきことを淡々としているというか。そこに生えている木や動物達と等しく人間の存在がある。

そのスケール感がすごいと思いましたが、知らないところに旅行するのと、タイムスリップするのを同時に経験したような衝撃！

アートは非日常を提案したり、美しい虚像をつくったりをするけれど、この暮らしを見てしまったら何もかも震むなと感じました。

でも、ふとした瞬間にこの村は15年後、30年後の話でできるのになって疑問に感じ、「こんなにかっこいい所、滅びるのが嫌だ！」と思って、自分はそのために生きるのも良いなど。そう考えていたと



地下足袋履いて山へ…(鈴木)

きに山北での協力隊の募集記事を見つけた。これまでもアートを通じて結果的に地域おこしになるような活動をしていたので、今までの経験も活かしたら良いなあとという考えもありました。

**加藤成美（以下加藤）** 私は新潟市内の出身で、東京の大学に行つて、横浜の会社に就職したんですけど：東京で社会人を迎えて3年目の夏に、自分の将来のことを考えるようになって。結婚とか子育てを考えたときに、東京や横浜にいると自分が生まれ育つた新潟のような環境で子育てできないなと思って、新潟に戻りたいという気持ちが出てきました。それで、仕事を变えて戻ろうかなと母に相談したら、地域おこし協力隊について教えてくれました。学生時代の友人が長野県で地域おこし協力隊として活動をしていて、活動を身近に感じられたのも大きかったです。

正直に言うと、絶対地域おこし協力隊になりたい！という強い思いがあったわけではなくて：。家族に何かあったときに駆けつけられる場所にいたいから新潟に帰ってきたという想いと、村上の地域おこし協力隊の活動内容のところに食に関連することが書かれていたことが響いて応募しました。



—村上に来た印象は？

**加藤** 新潟に住んでいたときに笹川流れには来たことがあったけれど朝日ははじめてで。だから、小さい頃に見たきれいな笹川流れの海の景色を思い描いて朝日に来ちゃいました（笑）。海がないのは分かってただけで：最初、車で長津地域を見に来た時、ずっと信号がなくて。カーナビの地図も出なくなるし、心配で支所の担当者の方へ電話しました。正直、本当にここで生きて行けるのかなと不安に思つたのを覚えていません。

**鈴木** 私は、遊びに来ていたことがあつたから、不安よりも、けっこう腹をくくって、ゼロからスタートだつて気持ちで来ました。とにかく、未知の世界というところが魅力で、知らない事にぶちあたるのが楽しみでしょうか。この山菜は何だろうか？「はやす（切り分ける）」ってどういう意味だろうか？みたいな日常が楽しいなあ。

**加藤** 私も今はけっこう慣れました。新しいことがいっぱいあつ

て、四季それぞれの過ごし方とかを教えてもらつていっているうちに、地域の人たちと関われるようになっていきました。知り合いが増えて、歩いていると声をかけてもらつたり、電話をもらつたり。地域の人たちに支えられてるっていう感じです。

—今の活動は？

**鈴木** 地域おこし協力隊の任期は3年で、ここに定住してもらえれば最高っていうもの。そのために自分で生業だったり、ここで生きていけるだけのものをつくるわけだけど、知らない場所だから何ができるかも分からない。だから、とりあえず1年目はとにかく地域のことを知ろうと思つて活動しています。4月に来てすぐに思つていたこととは変化があるし、抱えている問題も見えてきた。いっぱい教えてもら

小俣・大代集落の写真集（鈴木）



えている問題も見えてきた。いっぱい教えてもら

三分の一過ぎちゃったね。

**加藤** 実は、ちよつとどうしようかなと悩んでます。私も順子さんが話したように、まず知る事が一番大事だと思つていて、1年目は地域の人と関わつて、知つていければと思つていたけど、でもこの仕事って、やることを自分で決めるじゃないですか。今まで営業をやつていたので、目標とか成績とかがあつたりするけど、それも無い。会社員とは違つて全てを自分で考えなくちゃいけないのが難しいです。自分で地域の人に話を聞きに行つたり、話の中で気になつたところへ連れて行つてもらつたり：一個一個つなげていきながら学んでいる最中です。

**鈴木** 結果とかが見えづらい分野だよな。しばらくやつていく間に成果が出る事もあると思う。

**加藤** そうなんです。この間、小学校のスキー教室の手伝いに行つたら、そのときいた子が家で私と会つたことを話してくれたみたいで、その家のおばあさんが電話をくれたんです。そのお子さんがスキー教室のあと体調崩したから、あなたも気をつけてねって。そうやって連絡もらえるっていうことがとっても嬉しいです。

他にも、地域の農家さんとイチゴを収穫して小学校へ配りに行つたときには、子どもたちがイチゴ

のお姉さんだと私のことを覚えてくれて。親御さんと会ったときに「ありがとう」と言ってもらえたり、地域の子どもたち、その親御さん、先生方と仲良くなって、ネットワークを広げることができました。

最初は自分が遊んでいるみたいに思えて、日頃の活動に自信が持てなかったけれど、そういうことがあると、今動いている事は間違ってたなと思えるようになりました。

何より地域の人が元気でいてくれたり、楽しそうな姿を見て幸せを感じられるし、なんかあったらおいでと言ってもらえることがそれだけで嬉しいですね。

**鈴木** 本当、そこにいる人たちが幸せに、誇りを持って暮らしたいけることってすごく大事だよね。

今、自分にはなくて他の皆が持つてるスキルをまざまざと見てる。暮らしの知恵とかテクニクはもちろん、精神面もおおらかだし。私は運良くこうして学ぶ事ができていくけれど、これを皆が知ったら、自分の人生かなり豊かになるんじゃないかと思う。地元の人がほんとにすごく、魅力そのもの。宝物いた！あつちにもいた！という感じ。暮らしそのものが無形文化財



色鮮やかな赤カブ漬けづくり (鈴木)

— 逆に困ったことは？

**鈴木** 言いづらいいけれど、地域おこし協力隊という存在について認識のずれがあったように感じます。地域の切実な問題をすぐに解決できるわけではなくて。**加藤** 確かに、自分にはどうしようもできないこともたくさんありますよね。

私は、長津地域を担当している、いくつもの集落があるので、それぞれ色があるなと感じます。考え方や動き方も違う。いろんな課題や要望が聞こえてきて、それを言ってもらえること自体はすごく嬉しいんだけど、自分の中で考える事がありません。どこから手をつけていいかわからなくなってきたりして。悩んでばかりです。

たいなものだから、地域の人たちにはもっと自惚れていいんだよと伝えたいですね。

— 知る1年で得たものは？

**鈴木** 山北は普通の人の営みが本当にすごい。そんなすごい暮らしをしているすごい人が地域にはたくさんいて、私はその人たちが大切にしているものを大切にしたいと思います。

だから、私は地元のじじばばが先生になる学校をつくりたい。今、後継者不足が深刻で、先輩から教えてもらうっていうことがなかったら、この暮らしがばたつと途絶えちゃいますよね。途絶えてからつなぎ直すのはものすごく大変。保存食の作り方、電気がなくても過ごせる方法、生きる力の全てを継承したい。

はじめは本を作りたいと思っただけで、本じゃ分からないことばかり。それに私だけが知るんじゃないもったいないから、実際に習得できるまで学べる大人の学校を作りたい。そして、そこでできた副産物を売って、民泊とかもするようになって。いつの間にか人がいつもいる場所になって、じじばばが誇らしく仕事をしつつ、生徒たちに伝統を引き継いで還元できる。

そうやっていけば結果的に、いろんな問題の解決につながるかもしれない。そんな夢ができました。



教えてもらった山もちと大海 (加藤)

**加藤** 素敵な夢ですね。私は悲しい話になりますが、実は昨年祖母が亡くなったんです。私は生まれたときから毎年お正月には祖母手作りのこしあんを食べいて、今年、はじめてそのあんこがないお正月を迎えました。母が作ったあんこを食べたのですが、全然味が違って。なのでおばあちゃんにあんこの作り方を聞いておかなかつたんだらう、生きていくうちは聞けない、自分の大好きなものをこれから残したいって思いました。

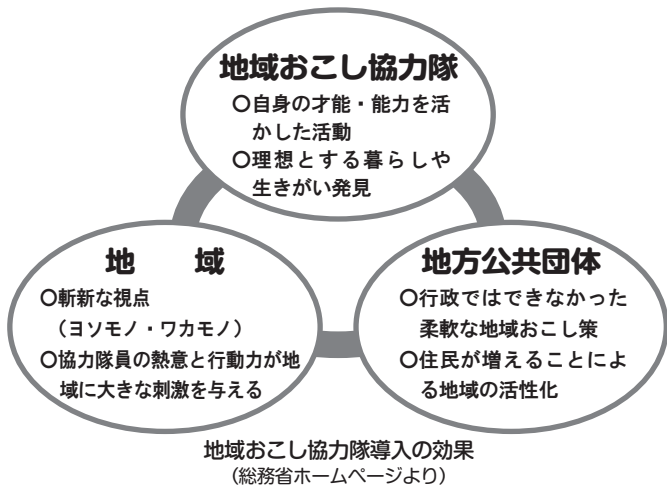
今まで長津で食べさせてもらった大海や山もち、山菜料理等、郷土料理やご馳走を次の世代に伝えていくために、これからはたくさん知って、自分が良いと思った物を身に付け、残していきたいです。それをしないと後悔すると思いました。

**鈴木** うん。絶対後悔するね。今は、そうならないためにできることをやろうと思えます。

# 地域おこし協力隊とは？

「地域おこし協力隊」とは、人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に受け入れ、地域協力活動を行ってもらい、その定住・定着を図ることで、意欲ある都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化を図っていくことを目的とした国の支援制度です。

地方自治体が募集を行い、地域おこしや地域の暮らしなどに興味のある都市部の住民を受け入れて



## 地域おこし協力隊に関するデータ

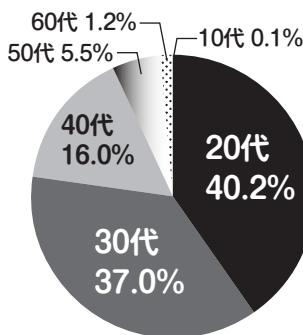
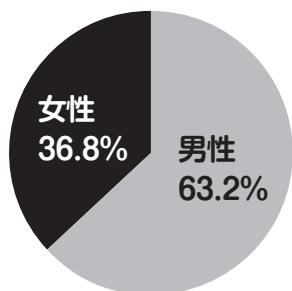
(平成26年度実績 / 総務省ホームページより)

全国では **444** の自治体で導入  
新潟県内では **10** の自治体で導入

**1,511** 名が活動  
**63** 名が活動  
※全国でも5番目に多い!

内訳は...

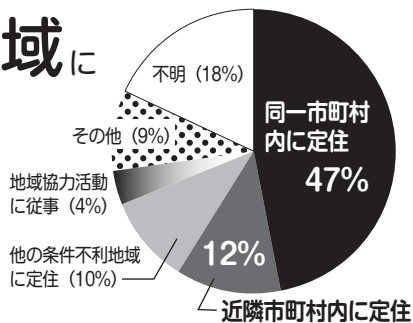
約 **4割** が **女性**



約 **8割** が **20~30代**

任期終了後、約 **6割** の隊員が

**同じ地域に定住**



※H27.3末までに任期を終えた隊員に関する調査より

地域おこし協力隊員として委嘱します。

隊員には地域ブランド化や地場産品の開発・販売・プロモーション、都市住民の移住・交流の支援、農林水産業への従事、住民生活の維持のための支援などの「地域協力活動」に従事してもらい、その地域への定住・定着を図っています。

隊員の活動期間は概ね1年以上最長3年までです。

新潟県は活動している協力隊の人数が全国でも5番目に多い!

地域おこし協力隊の導入状況ですが、平成26年度時点での実績は左のとおりです。

隊員の約8割が20~30代の若者であり、任期終了後も約6割の人が同じ地域に定住しています。

新潟県では、全国的にも5番目に多い63名が活動しています。中でも、十日町市(21名)、佐渡市(16名)で多くの協力隊が活動しています。

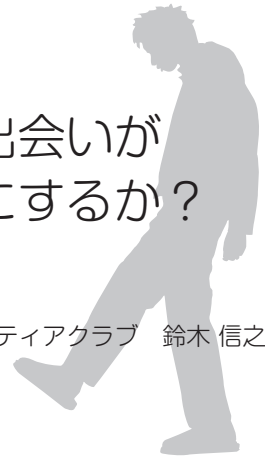
導入先進地である中越地方で、

地域おこし協力隊のサポートをしている阿部巧さん(中越防災安全推進機構)によると、「大切なのは、隊員・地域・行政の適度な距離感。それぞれの思惑がある中で、上手にバランスを取りながら隊員が動いている地域は、任期終了後も隊員が定住し、地域も元気になっていく」とのこと。

隊員の独りよがりでは地域は動かない。しかし、地域の都合ばかりを押しつけていても、新しい風は吹かない。上手な補助人活用の秘訣は、このバランスにあるようです。

## 補助人との出会いが 地域を元気にするか？

高根フロンティアクラブ 鈴木 信之



活動の指針となりました。平成27年には新たな世代でワークシヨップが行われ改正されました。

その後、平成15年樹木・環境ネットワーク協会の渋澤さんとの出会いにより、聞き書き甲子園の卒業生の立ち上げたNPO法人とつながり、学生達が年間通じ来訪されるようになり、その学生の一人が集落に移住しました。また、そのNPOの関係からキャンノンマーケティングジャパンCSRの受け入れが始まり、社員の中にはクラブの会員となった方も有り、その方は夫婦で東京から頻繁に訪れ一緒に活動しています。

私が住む高根地域で自分達の地域は自分達で考え行動しよう、平成8年、地域づくり活動を始めました。その中高根フロンティアクラブが結成され、現在に繋がっています。活動ではいろんな方達と出会い、いろんな方達との繋がりが広がってきました。



また平成16年森づくり講演会に来ていただいた京都学園大学の中川重年先生との出会いにより、その後先生の紹介で(株)OTTOさん(CS R(企業の社会貢献活動))として遊休地へのナラ植樹に来られるようになり、社員との交流が続いています。

廃校利用では、地域の人達だけでは前に進めない状況のなか、民俗研究家結城登美雄さんの後押しで、山のいし学校食堂IRORIを開店することができました。その他にも、いろんな方々の支援やお付き合いにより活動が広がってきました。

当初は、いろいろな方々が来られると何かしてくれるかなとの期待が大きかったのも事実です。しかし実際何かを実行する時には、自分達が行動しなければなにも起こらず、前進はないと感じています。その人達が何もしてくれないということではなく、いろんな新しい発想があり、それを教えてくれます。それを地域がどのように活用するかにかかっているような気がしています。

また地域の伝統文化の継続は大切ですが、生き残るための変化は必要です。その時に求められるのは、前例に従うだけとか、合意形成だけを求めることはしないということが必要で、それができるのは、やはり外からの発想です。

そういう地域を変化させ、元気にする補助人を活かすには、地域の人



達が補助人と一緒に自分達の地域課題に気づいたり、解決する方法を考えることだと感じています。

また、地域外の人と一緒に活動をするとき地域の財産を補助人にもシェア(共有)することが必要不可欠だと思えます。地域の利益だけを為に補助人を使うのではなく、そこで自分達の財産を活かすためにお互い協働し、生まれた物を共有の財産として活かす取り組みがあれば定住にもつながると感じています。

昨年村上市に地域おこし協力隊が配置されています。来年度も配置が予定されています。3年間は国が補助する制度ですが、全国で、その後6割の方が赴任先に定住しているようです。定住してもらうには、やはり人と人との繋がりを大切にすることがもっとも重要であると感じています。



## 風かおる丘ハーブメイツあらかわ 酒井幸子さんに直撃！

さかい さちこ  
酒井 幸子さん 村上市荒川地区

東京都出身。ご主人の転勤で村上市荒川地区に住みはじめる。東日本大震災のときに、地域の人たちが助け合っている様子を見て、地域活動について考えはじめ、ちょうどそのとき募集があった「あらかわ地区まちづくり計画作成」のメンバーに友人と応募。もっと荒川地区を良くしていきたいという想いから、「風かおる丘ハーブメイツあらかわ」の活動に力を入れている。

### 面白い人・取り組み紹介インタビュー

― 活動のはじまりは

あらかわ地区まちづくり協議会の事業部会の中で行っている活動のひとつで、誰もが自由に参加できるグループです。3年前から活動をはじめ、現在会員は約50名います。

もともと、まちづくり協議会で、皆と地域課題についての話し合いを行ったときに、地域の人たちが集まる場所を作りたいという想いと、総合運動公園があまり使われていないという課題が出てきました。そこで、もっと運動公園を人が来てくれるような場所にするにはどうしたら良いのかと考えて、お花が咲いていけば女性が見に来るのではないかとアイデアから、せっかくならお花が咲いた後も何か活用したいとラベンダーを植えることになりました。

正直なところ、実際にアイデアが出てから実践に至るまでの道のは長かったです。でも、アイデアを出した女性陣の想いが強かったことと、皆でやったほうが可能性が広がるということから根気強く想いを伝えて、視察など具体的にイメージがわく研修に取り組んできたことで、皆でパワーアップ

し、足並みが揃った気がします。そして、3年前に運動公園でラベンダーを15000株植えしました。今は全部で15種類のハーブが植わっています。

普段の活動は、春先から草むしりを月に2回、第2日曜日と第4金曜日の朝6時から1時間程度行っています。石けんづくり、ハーブトサシエづくりなどの体験教室を行ったり、特技を持った人たちがたくさん埋もれていたので「私やってみるわ!」という声でどんどんアイデアが実現しています。

ラベンダーの花が咲く時期には運動公園でラベンダーフェスティバルを開催して、ラベンダーの収穫体験やハーブティーの提供をしています。

― 今後の展開は

廃園となった荒島保育園を活用して、コミュニティカフェを作りたいと考えています。地域の人々がふらつと立ち寄れて、世間話ができ、さあまた明日からがんばろうかなと思える場所になってほしいと思っています。運動公園で収穫したハーブを使ったオリジナルブレンドハーブティーを提供したり、様々な体験イベントができたらいいなと考えています。前向きな話が飛び交って、一緒にこのま

ち良くして行こうよ、ここに住んで良かったねと話せる、情報の集まる拠点になればいいなと思います。

今まで顔も知らなかった人たちがラベンダーを介して集まって、いろんな個性をもっている人と活動できることが自分にとっても収穫で楽しいです。

昨年、海が見えて、ラベンダー畑を見渡せる高台に「幸せを呼ぶ鐘」がつけました。ラベンダーは花が咲いていない時期にも香ります。ちよつと足を伸ばして運動公園に来て、歩きながら日中は海からの風、朝晩は山からの風に乗って香るラベンダーを感じ、鐘をカランと鳴らして癒されてほしいです。今年も6月下旬から7月初旬にかけてはラベンダーフェスティバルを行いますので、是非来てください。活動への参加は自由ですので、いつでもどうぞ。



地域団体紹介

# 村上 オハナ ネット

住所：村上市緑町3丁目3-8  
TEL&FAX：0254-52-6612  
E-mail：murakamiohananet@gmail.com  
代表者：渡辺ひろみ

Facebook ページ  
QRコード↓



- 活動分野：家族支援
- 活動地域：村上市全域

ohanaとは、ハワイ語で家族や深い絆で結ばれた人々を表します。家族だけでなく、イベントで知り合った方々、地域の方々が家族のように結ばれ、支え合い、輝いて「お花」のように咲いてほしいという願いを込めて名付けられた村上ohanaネットさん。

イベントを通して大人を元気にすることで、子どもや家庭、地域を元気づけたいと活動されています。「心と身体の健康は切り離して考えられない」をモットーに、心身両面からのアプローチイベントの企画・運営を行っておられ、スタッフ自身が身をもって体験し、良いと思った内容のみをイベントとして提供。この村上で「もっと楽しく、元気に、自分らしく」生きられる人が増えるよう、地域の一助になりたいと考えて活動されています。

今、注目を集めているのは月2回開催されている「ママカフェ」妊活・妊娠中のプレママから、乳幼児期のお子さんをもつママを中心に、子どもを連れて気軽に集える場づくりに取り組み、普段子育てに忙しいママ達もホッと一息つけます。お友達を増やしたり、悩

み事を相談したりと自由に過ごす間、子どもたちは同じ年頃のお友達と遊べる、とても居心地の良い空間です。今月の開催は3月7日、28日月曜日10時〜14時まで、村上市鍛冶町にある富樫工務所さんモデルハウス「木くぼりの家」で行われます。

また、地区公民館と協働し、親子で作業を行ったり、子育てについて学ぶ講座にも取り組んでおられます。村上で子育てを頑張るパパママを応援し、支えてくれる心強い存在です。

イベント開催情報は是非フェイスブックページをご覧ください。



## 編集後記



例年に比べ、雪がとてもし少ない冬でした。雪かきや雪下ろしに加え、危険な雪道の運転など雪は厄介な存在ですが、今シーズンは、真っ白な雪景色が見られると思わず写真を撮りたくります。

今号は「補助人」という、普段あまり聞き慣れない内容の特集ということで、その存在をまずは身近に感じていただきたいという想いで制作しました。実際話を聞いていくと、華々しい活動というよりは、普段の暮らしに密着した、地道な活動が多く、地域の方々に寄り添うような取り組みがたくさんあることを感じました。逆に言えば、活動が表に出づらく、すぐ近くにいななければその存在ははや活動に触れる機会があまりないということですね。補助人目線で日頃感じていることや、考えていることが伝わらないのももったいないと思います。

また春から新たに2人補助人が加わる予定があるそうです。全国各地で山ほどの補助人たちの出会いが楽しみです。

〈発行元情報〉  
発行日 平成28年3月1日(年3回発行)  
取材・編集 特定非営利活動法人  
都岐沙羅パートナーズセンター  
発行責任 村上市自治振興課  
連絡先 0254(53)2111  
内線331